南会津高校を巣立つ
私たちが〝今〟思うこと

３月は、卒業や進学、就職や転居などで慣れ親しんだ環境に別れを告げる時期であることから、旅立ちの季節とも呼ばれています。本町唯一の高校である南会津高校の卒業生も希望や不安を抱き、学び舎を巣立つことでしょう。

現代の高校生は、情報技術が発達し、変化の予想が難しい時代を生きていると思います。さらに、学生時代という多感な時期にコロナ禍やウクライナ戦争、世界的な物価高などを経験し、様々な困難にも直面しています。

また、高校の統合に伴い、南会津高校南郷校舎は16名の卒業生を送り出すのを最後に、閉校舎となるため、後輩のいない校舎で過ごしてきました。そんな南会津高校の南郷校舎と本校舎の生徒それぞれに〝今〟感じていること、考えていることを聞きました。

Interview 01

南郷校舎卒業生
酒井　蓮（れん）　さん

「つらいことや大変なこともあったけど、仲間とともに充実した3年間を送ることができました」と話すのは、南郷校舎最後の卒業生の酒井蓮さんです。

卒業後は、県内の食品製造会社に勤務します。「幼い頃から親しみのあった食品の製造に関われることが嬉しいです。家族のもとを離れ、生活することに不安もありますが、社会の一員として頑張りたい」と新生活への意気込みを話します。

「探究学習で地域の方々の協力を得ながら、只見線の模型を制作したことも思い出深いです。チームのメンバーと衝突することもありましたが、何度も話し合って完成までたどり着くことができました」と高校時代の思い出を振り返ります。

また、後輩がいないことに特に寂しさなどは感じなかったです。むしろ、同級生同士の絆が深まったと言います。

同時にこれまで支えてくれた母への感謝も忘れません。

「引っ越しの準備、新生活の想像をする上で、改めて母の偉大さを感じました。これまで支えてくれた家族へ恩返しする意味でも、一人前の社会人になり、社会に貢献したい」

目標とする企業への就職が叶い、新天地での酒井さんの生活が、この春、始まります。

Interview 02

南郷校舎卒業生
齋藤　夢叶（ゆめか）　さん

南郷校舎卒業生の齋藤夢叶さんは、卒業後、県外の専門学校へ進学します。

子どもが好きで「保育士になりたい」という夢を叶えるため、地元である南会津町を離れる決断をしました。

「都会に比べると不便な部分もあるけど、生まれ育ったこの地域が好きです」

齋藤さんは南会津の良いところは「自然の豊かさと人の温かさ、人と人のつながりが強いところ」だと話します。

「地域を歩けば、挨拶を交わしたり、私のことを気に掛けてくれたりと、温かい気持ちになります」

しかし、進学先の場所には、知り合いがいません。慣れない寮生活となることと、新たな人とのつながりをつくることへの不安もあると言います。

それでも、

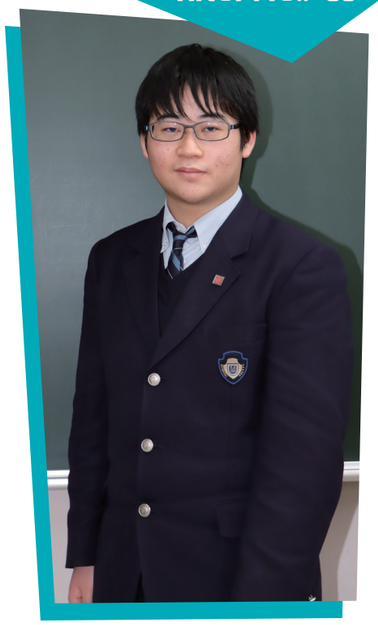
「将来は、保護者の方や同僚の保育士となる方に信頼してもらえる保育士になる夢を叶えて、子どもたちの良き手本となる存在になりたいです」

そう意気込むまなざしに迷いはありませんでした。

いつか機会があれば、この地域で仕事ができたらと話す齋藤さん。

夢の実現に向け、今、大きな一歩を踏み出します。

Interview 03



南郷校舎卒業生
佐野　正汰（しょうた）　さん

「僕が志望校に合格できたのは家族、高校の先生方、塾の先生方の協力があったからこそだと思います。とても感謝しています」

そう振り返るのは、南郷校舎の卒業生の佐野正汰さん。卒業後は大学に進学し、経済学について学びます。

幼い頃から鉄道が好きで、進学後は、特にローカル線の交通経済や観光列車の経済などについて詳しく学びたいと話します。

「実家から高校へ通うことができたのは良かったです」

家族や地域の人に見守られ、18年間を過ごしてきました。

春から県外で一人暮らしが始まります。

将来、南会津町には戻らないだろうと言う佐野さんですが、地元には特別な思いがあります。

「県外に進学、就職しても帰省などで南会津には帰ってきます。その時に、安心できる場所として存在し続けると思います。そして、この町には美しい自然と澄んだ空気、美味しい食べ物があります。それはどこへ行っても自慢できるものであり、誇らしいものです。この町を少しでも知ってもらえるために、僕にできることをやっていきたいです」

進学のために南会津町を離れても、地域への思いと育ててくれた方々への感謝を忘れずに、旅立ちます。

Interview 04

本校舎卒業生
広野 優太（ゆうた） さん

本校舎を卒業後、県内の短期大学に進学し、幼児教育について学ぶ皆川彩希さん。

将来は保育士になり、子どもたちの成長に関わっていきたいと意気込みます。

「私は高校を卒業後も実家から進学先に通学します。家族のもとから通える学校があることは嬉しく思います」

家族の存在が大きな力になっている様子。

「卒業を迎えるにあたって、いつも応援してくれる、辛い時は寄り添ってくれる家族に感謝の気持ちでいっぱいです」

また、自分にできる範囲で地域に貢献できればと話します。

「地震などの災害も少なく、日常生活を送るのに困ることはないので、住みやすい地域だと思います。ただ雪が多く降ったりするので、高校でも除雪のボランティアをしていますが、助け合いが重要だと思います」

高校生活では、友達と過ごす何気ない日常生活が楽しかったと振り返る皆川さん。

「短大での生活が楽しみです」

これまでの思い出を胸に、次のステップへ羽ばたく自分へ、期待を巡らせます。

Interview 05

本校舎卒業生
皆川 彩希（あやの） さん

「家族と地域の人たちに支えられて、自分のやりたかったことに打ち込んでこれた18年間だったと思います」と話すのは、本校舎を卒業する広野優太さんです。

特に打ち込んだのが高校時代の部活動だと言います。陸上部に所属し、やり投げを専門種目とし活動しました。

高校2年、3年時には、県大会で入賞。東北大会まで駒を進めました。

「東北大会に出場できたことは自分にとって大きな財産となりました。他校の選手との交流も増えましたし、結果を出せることで自信や誇りにもなりました」

競技生活を送る上で、家族の支えも必要不可欠でした。

「送迎など様々な部分で負担をかけたと思いますが、そのおかげでやりきることができたと思います。改めて感謝したいです」

卒業後は、県内の精密機械製造会社に勤務する広野さん。

「企業見学や先輩の話を聞き、この会社で働き、社会の役にたちたい」と決意しました。

春から始まる社会人としての生活に不安はあるものの、これまで自分が支えられてきたように、これからは自分が困っている人に手を差し伸べられるような大人になりたいと話す広野さん。目指すべき自分に向かって歩みを進めます。

高校生に聞いた 若者が帰りたくなる町って どんな町？

情報化、グローバル化、少子高齢化が進む現代社会において、次世代を担う若者たちがどんな町に住みたいのか、どんな町になってほしいのか聞きました。

この地域は車社会だから、道路が発展したらいいんじゃないかな。

簡単なことではないけど、建設中の道路が早く完成してほしいし、高速道路が近くにできたら嬉しい。

デジタル化が進んでいて、様々な娯楽が家にいながら楽しめるようになったり、欲しいものがインターネットで注文できて、翌日に届いたり、不便な場所だとは思わないです。むしろ、優しい人が多い住みやすい場所だと思います。

ファミレスのような何人かで一定時間いれるような場所があったらいいなあ。若者が集まれる場所みたいな。

インスタ映えする何かがあったらいいと思います。

雇用機会がもっとあったらいいのかな。地域に貢献できる仕事の選択肢が増えれば、良いと思います。

トマト、お酒など美味しいものがたくさんあるし、景色がきれいなところが多くあるから、もっともっと多くの人に認知してしてもらえたら、嬉しいです。

リモートワークなど自宅にいながら仕事ができるようになっていると聞きます。

そういった仕事があれば、南会津町にいながら仕事ができるのでは。

若い人たちが楽しめるイベントがあったらいいと思います。

進学などで一度は町を離れることが増えている若者たち。そこから帰りたいと思える地域とは。

高校生ならではの視点で、この町について考える５人。

これまでこの町で過ごした18年間を糧に、それぞれの夢や目標に向かって進みます。